
Humpty=huntbri ~ ハンプティ = ハントブル ~

洸淋寺 凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Humpty"huntbri"ハンプティー"ハントブル"

【Nコード】

N7599D

【作者名】

洸淋寺 凧

【あらすじ】

世界は時を経るごとに暑くなる。その気温は平均で約五十・・・。
。そんな所で人間の生存は不可能。政府はとある研究者に熱を遮断する服を作るように命じた。研究者は開発を進め、ウォームシャットスーツという服を開発した。しかしそのウォームシャットスーツが大変な事態を巻き起こす事となった！？

ハンプティ・ダンプティ！。それは一度壊れてしまったら、二度ともとは戻らないもの……。

2050年……。今は室温が四十五。これはまだかなり涼しい方だ。一日で八十を越える日も一年を通してざっと数十回はある。こうなると人間は生きていくのが不可能だ……。

そこで我々は政府直々の命令で、熱を遮断する洋服を作るように命じられた。

我々は数年に渡り研究に研究を重ね、熱を遮断するには卵型がいいと判断した。いや、卵型というより卵だろう。

卵は大切なヒナを守るために母鳥が対応してきた愛情だろう。

卵の成分で洋服を作れば熱を遮断出来る。我々はそう考えたのだ。そして案が拳がってから数年……。我々はいかに熱を遮断する洋服、通称ウォームシャツスーツ。頭から下半身までを卵の殻のような物で包み、手と足と目だけを出すようにした。

やがて政府はこれのスーツを認め、世界へ流布するよう言った。しかしそれは惨劇の始まりであった……。

「……」

オレは闇に息を潜め、ハンプティに忍び寄る。狙いは三丁目の花田さん一家の卵化だろう……。

ウォームシャツスーツが出来上がり、政府はまず母国のアメリカへ流した。

ウォームシャツスーツは熱を遮断する事が出来る。病気にも掛かることは無い。しかし大きな難点があったのだ。ウォームシャツ

トスーツは一度着用すると脱ぐ事が出来ないという事。無理に脱ごうとすると激痛により自我を失う事。その二つだ。政府はその難点を知りながらも熱を一刻も早く遮断しようと難点を公表せずに流した。

やがて時は経ち2080年。ウォームシャットスーツはアジア諸国の中の一つ、日本へも進出した。その時はもうアメリカの人々は自我を失っていた。

2081年、日本でウォームシャットスーツが着用され始めた。しかしそこでカオスが舞い降りた。今まで平均気温が五十 以上だったのがいきなり七 まで下がったのだ。

しかし時すでに遅し。日本では約半分の人々が卵化していた。あのおえらいさんはウォームシャットスーツについてこう言った。

「ウォームシャットスーツは昨年までは活躍した。しかし気温はここちよくなりもう必要ない。ウォームシャットスーツは端から見るとまるでハンプティ・ダンプティのようだ。そんな恥らわしい格好はもうやめよう！皆で服を脱ぐんだ！」

その途端日本でも自我を失った人々が増え出した。

自我を失ったハンプティ達は仲間を増やす為に町を徘徊し、狙いを定めた奴にウォームシャットスーツを被せる。これで立派なハンプティの出来上がりだ。

話しはそれだがオレはそんなハンプティ達を元に戻す仕事をしている。

卵化してしまった人間を元に戻すには卵の殻を割るしかない。卵の殻は硬く、なかなか悪のは難しい。しかも割るのに手間取っているうちに自分までハンプティにされてしまう。あんなずんぐりむつくりだけはゴメンだ。

「誰だ？」

ハンプティが言う。

「ハンプティの癖に喋れるのか。つまりまだ自我は失っていないな？」

「ああ・・・」

自我を失うとハンプティ―は喋れなくなる。

「オレの名前は009」

「009？なんの番号だ？」

「オレの両親はアメリカでのウォームシャツスーツの着用でオレの小さい時に死んだ。それからオレはハンプティ―撲滅組織、通称ハンプティ―・ハンターに入れられた。009それがオレの名前だ」
「・・・」

ハンプティ―は黙り込む。

あのハンプティ―はオレを哀れんでいるのか？

「私は、もうこれ以上ハンプティ―の被害者を出したくないと思っている。責任者としての思い、そして君のような親を、命を、大切な人を失った人々を救わなければならない」

「・・・あなたは？何物？責任者？」

「ウォームシャツスーツを開発したのは私の祖父だ・・・。そしてウォームシャツスーツの危険性を知りながらもそれを隠して流したのは私の父だ。父は私の小さい頃にハンプティ―となり、死亡した。しかし父は最期、私をハンプティ―にした。だから私はこの姿・・・。さあ、私を殺してくれ 君の恨んでる人物の息子だ！」

ハンプティ―の原因はこいつの父・・・。こいつを殺しても恨みが晴れるわけではない。

「ハンプティ―・ハンターの仕事はハンプティ―を殺す事では無い。あくまで元通りにする事だ。だからオレはあんたを元に戻す。それが使命だから」

「・・・そうか。私は君に殺して欲しかった。下手をすれば自我を失ってしまう事を恐れ、生きている日々はもう懲り懲りだったからね。はつきり言う君に殺して欲しかった」

こいつは何を言っているのだ？

「だからオレはおまえを助けてやるって・・・。」

「無理だ。開発者の孫だ！君なんかよりもずっとハンプティイについて詳しい。ハンプティイは自分だけでなく、他人に抜がされそうになっただけで自我を失ってしまうんだ。かち割ろうとするなんて言語道断。自我を失うと体はハンプティイによって乗っ取られる。殻を全て壊すまでそれは解けない。それにハンプティイと化してしまったらその強さは尋常では無くなる。君みたいな子供では到底かなわない。あつという間に君もハンプティイだ！」

「子供では無理・・・か。そんなねやつて見なきゃ分かんねえよ！」

オレは地を蹴って舞い上がる。そしてハンプティイに蹴りを入れる。

「ま、まっ・・・」

今まで普通の目をしていたハンプティイの目があつという間に黒くなり、腹部の辺りからは亀裂が入った。

自我を失ったか。

「つと。逝くぜ！ハンプティイ！」

右、左、右、右、左と軽やかに蹴りを入れる。

ダン！

腹に重たい物を感じた。

「つつ！？」

腹部には亀裂を口代わりにして噛み付いているハンプティイが。

「い、いつの間に！？」

通じていないと分かっているみたい、口からそんな言葉が漏れてしまう。

段々と血が流れて行く。意識が朦朧としてきた。

「・・・」

オレはこのままハンプティイにされるのか？

なつてたまるものか。いや、なつては行けない！ハンプティイになる位なら・・・。

オレ是最悪の事態の為に忍ばせて置いた、加工済みニトロ口を取り出した。加工をしたニトロ口は爆弾どうぜん。いや、爆弾だ。

オレは死ぬが中の人には助かる。あの人だってこんな人生を望んでなんかいなかった筈だ……。

二トロの入った試験管を地面に叩き付ける。
パリン……。

クリアなガラスの割れる音が響く。

三秒……二秒……一秒……。

「フィニッシュ！」

……。

もう何の音も聞こえない。オレは朽ちていくだけ……。あい
つは生きる。立派な科学者として。祖父の跡を辿り……。あいつ
なら、ハンプティーを撲滅する研究をするだろう。たった今出会っ
た人物にオレは賭けてみたいと思ったのだ。たとえそれが命だろう
が構わない。ただオレは朽ちるだけ……。

死んだ後には無しかないのだろうか。まあオレは天国だとか地獄
は信じてないからそれでいい。

オレは死んで無となる。

さよなら……。名前すら聞けなかったが、オレはおまえを信じ
る。オレが賭に勝つか、ハンプティーが勝つかは分からない。だが、
おまえだけがオレの希望。

……じゃあな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7599d/>

Humpty=huntbri ~ ハンプティ = ハントブル ~

2010年10月8日15時47分発行